

コスモス 全国同人会

村松 武司

一九八〇年九月十五・十六日、東京・中野サンプラザで、「コスモス全国同人会」。

とはいっても三〇人ばかり。敗戦翌年の発刊から現在まで、このような会を持ったのははじめて。いちど「コスモス二十周年」、「詩の歴史の展望」という展示会を、日比野図書館でやったとき、各地の同人が集まったことがある。そのときから十五年。

第一日の九月十五日

地方同人の珍しい顔が現われた。十一時半、出席者紹介、議事予定をきめ、秋山報告に入る。進行は村松。

「人民詩精神について」秋山報告は、戦後「コ

コスモス」が掲げた人民詩精神を、戦前の「詩精神」「詩行動」に溯つて求める。当時アナキズムとボルシェヴィズムの相剋を内部に孕みつつ、同時に人民戦線の前ぶれとしての協力であった側面を強調。一九三六年ヨーロッパの情況、フランスの人民戦線内閣成立やイタリーのエチオピア侵攻、スペイン革命に対応する日本の若い詩人たちの姿勢に触れる。この年（昭11）から二年後の国家総動員法公布まで一足の距離。思想犯保護観察や、講座・労農派の一挙検挙、人民戦線派文学者に対する執筆禁止のあいづなで、プロレタリア詩人の転向と戦争詩、モダニスト詩人の自己否定と戦争詩——変質と転回が進められる。秋山報告の冒頭のこの部分は、それがわれわれの「いま」であることを考えさせる。

以上をまぐらとしながら「プロレタリア詩と人民詩精神の関係」に入る。かつての協同はなぜ必要だったのか。それが反ファシズム問題であったゆえ、擁護されるものは民主であり、同時にプロレタリア階級を含むものであったから、人民詩精神も当然自己の内部の「階級性」との関わりを論じなければならぬ。人民詩は天皇とわれわれとの対立、国家権力とわれわれとの対立において成立する。

そしてコミュニストとの対立において自由である（が、コミュニズムは果して権力を否定できるであろうか？）。その他、秋山は詩と生活、詩と事件の問題を提起しつつ報告を終えた。午後一時。

午後二時、午前の報告に対する各人の意見と討論。

木原 これからさきの人民詩精神。権力の虚妄に對置するものとして、詩の虚妄性の強調。モダニズムに対する戦いと運動の乏しさに対する批判。

西 詩の質がよわく、詩の範囲がせまい。社会的題材の不足。日常性を描く詩の展開力の不足。

秋山 否。詩はもっと自由でいい。

長谷川 昭和十年代のプロレタリア詩の間口を拓ける。戦後に現われた戦争詩の極限描写によって、戦争詩における日常性が追放された。一定の類型化が生じた。詩における愛情、愛欲の主題について。

清水 意識的、積極的な反権力ばかりでなく、何となくいやだという者、第三の非権力の層をふくむ人民詩の提起。

吉田 プロレタリア詩、民主主義文学運動、松川詩集への参加など。階級斗争のなかの一

人としての詩運動と人民詩の関わり。

高島 住民運動の限界。一つの花を花として描く態度の再評価。

申 人民詩精神に対する批判の自由について。その他

午後五時閉会。一日目の出席者は、内田博、近藤計三、小宮隆弘、長谷川七郎、伊藤正斎、清水清、吉田欣一、松永浩介、黒川洋、村松武司、暮尾淳、秋山清、河合俊郎、野口清子、山野チエ、木原実、申有人、西杉夫、高島洋。夜は懇親会。

九月十六日。同じく快晴。

十時。昨年来の「コスモス」に八人の連続エッセイ「詩はなぜ書くか」に対する木原実の総括。

それぞれの評論が各人の個体史に深く関わっていた点に注目。各人への短かい解説をすると共に、総じての欠点として、いまの時代あらためてなぜ書くのかの問題が弱い点を指摘。ことに政治から自立したはずの詩が、その後どうなっていたのか、その疑問、否定を伴わない、「詩への信仰」、詩を疑っていない態度を批判した。報告は一転して、虚妄の政治権力に対しては、いつそう虚妄であるべき詩を提唱し、詩はなぜ書くかの問いの意

味が、じつは、各人の評論が欠落した部分に存在すると結んだ。

討論に入り、吉田は、一篇の詩の興奮性について。申は、金石範の言葉をかりて「日本語にわれわれ在日朝鮮人は高い月謝を払いすぎた」だから取りもどすために日本語で詩を書くこと語った。木原は闘争詩の現場と闘争の詩の書かれる場所の位相のズレについて。秋山はイデオロギーをかくして表現しようとするウラコトバ、とくにその政治性と啓蒙主義への批判、詩は自分のために書くことを強調した。小宮は、プロ詩の欠落としてのウラコトバについて。吉田は、自分のために書くその重たい意味について。内田は、自己の中にある俳句・短歌の影響と、その現実肯定への傾向について。向井は、自分の役に立つ話が聞きたい、と批判。高島は、プロ詩の啓蒙的傾向を制御する方法論について。申は、政治性を抜いた詩はあり得ないと強調して、このあたりから申の「光州」の詩に対する各人の理解と批判がつづいた。

最後に、運営について。会計報告。同人費。同人の推薦と退会。合同詩集の提案。

この日の出席者は、前日に加えて向井孝。五時に解散。

杖

杖をついて歩いて来る。
となりのおじいちゃんが。
ゆっくり、ゆっくり。
畑に近いみち。
着ながしで帽子をかぶっている。
猫がうしろから行く。
白菜の畑に沿うて。
気ごころの通ずるものが
あるのかも知れない。
猫と人間といえども。
杖をたよって
歩くはやさで
猫も行く。
梢にのこる十五、六枚の柿の紅葉。
ふと思った、
昨日の夕刊の写真。
土星の環のこと。

夏川小吉

回想と感想

「遠地輝武研究」

松永浩介

遠地輝武が六十六才で死去してから十三年になる。回想を記念して出版したこの本に、重国林、秋山清、加賀谷洋、西杉夫、内田麟太郎、川口克己、タマキケンジ、内田博、田村正也、岡亮太郎、野口清子、の十一人がそれぞれ立場から回想、批判を書いていて興味深い。

私が遠地を識ったのは「詩精神」からである。作家同盟が解散してから出たこの詩誌にはプロレタリア詩人会の時代には見られなかった若い詩人達が集り、遠地がいうところの「本誌はたまたま当時のジャーナリズムをとらえた、不安の文学」の興隆期を背景として、鬱然たる進歩的陣営を形成し、詩の仕事にお

ける多くの問題や作品を花咲かせて「詩精神」時代を形成した。時である。遠地の第一詩集「夢と白骨との接吻」を私はその頃読んでいない。六一年に「遠地輝武詩集」が刊行されて始めて読み、伊藤信吉の解説で「芸術革命の精神と方法を絵画的にとらえていたことに関係がある。つまり著者は絵画的造型をそのまま詩的表現に転化したのであって、絵画的造型と詩的造型との機能的なちがいを混同した」といつているが、形式破壊を裏づける内的動機の弱さと重なって重国林がいつてるような重さが私には感じられない。年譜にもあるが、一九四八年に私は船方一と二人で中野区千光前の遠地宅を訪ねて詩誌を出すようハッパをかけた。翌四九年十月に第一次「新日本詩人」が出たが五十一年十月第六号で文学、思想上の分裂で休刊する。その次に新しい「新日本詩人」が出たのは五十八年、発行について遠地が「本誌はたまたま『新日本詩人』の名を踏用したが、新しい同人雑誌であるので、全く旧新日本詩人とは別個のものであることを一応ハッキリしておきたい。」とことわっている。然し結果としては第二次「新日本詩人」と一般には受け取られていたので、はなかるうか。その頃私は党を除名され、俸

がカリエスになって入院し、その費用が収入の倍もかかるので詩どころではなかった。同人として参加した覚えはないが（新日本詩人）は発行の度に二十部位、どきと送られてきてその処分に閉口した。（新日本文学）を十五部程配付していたのが五部位にへらされた頃であるから詩誌など売れよう筈がなかったし、売り歩く暇もなかった。作品も身を入れて読んでいたように思っている。遠地夫妻の病臥、好子夫人の入退院の繰り返しと時を同じくして私の方も入退院十五年間の繰り返しであった。

秋山清が「遠地輝武の『農民詩人』への小感想」を書いているが私には初耳で、そんなことがあったのかというおどろきであった。西杉夫が「詩人」時代の遠地輝武を取り上げてその動向に厳しい批判を向けているが三六年の五月号の「リアリズムの行方」で「私は今やリアリズムということすら全く信じられなくなつた一人である」といつた遠地は、「これがかつてリアリズムを信じ、社会主義リアリズムを説いた私のなれの果である。」といひ、では、リアリズムがどこへいくかについては、「私は速度に答えるであらう。ニヒリズムへ、

——それからデカダンスへそれは行こうとしているし、又、必ず、行く」と断定的であった、と西は指摘し、「現実を細密に描写し得ると云うことはそれ自身で大したことだ。大抵の者は途中で歌ってしまふ」と小野十三郎が指摘したのが、三月号の「細叙主義其他」であるが、わたしはこの方に当時の詩の方法上の問題がよほどシャープにとらえられていると思う。と書いている。こんなこともあったのかという思いで、その頃「詩人」を読んでいた筈の自分の迂濶が苦く思ひ出される。内田麟太郎の「遠地輝武ノート」(「有情」とも)の——これは遠地の小野十三郎論を取上げて木目こまかく考察してすぐれていると思うが引用すると長くなるので止める。野口清子が二次「新日本詩人」一号から二十号迄の遠地のエッセイ、雑記を要約してのせてい

秋の雨

高島 洋

細々とふる秋の雨はつめたい

て遠地の到達点を理解する上で参考になる。晩年、苛酷な病魔と闘いながら、絶唱といわれた作品「けふる」の中で

ある浅間の画家の悔恨などをおもいだしながら
あは悠々けふぬれぬれども
やはりわたしは一個の共産党員として死にたいので

のなかの「やはり」にこめられた思いは田村正也と同じく私もきいておきたかった。

何年であつたか思ひ出せないが、ある時、「中野は字が下手だね」と遠地がつぶやいたことがあつた。私は中野重治の筆跡をみたことがないので何とも答えようがなかつたが、

その時は中野から遠地に筆書きの通信があつてそれをみながらの遠地のつぶやきであつたようだ。これを書くために木村好子詩集「極めて家庭的に」を出してみたなら、扉に

君あらず面影のみが夢かとも
瞳を去らで淋しき冬かな
よみ人知らず 輝武
と筆で真いつばいに書いてあつた。遠地は筆書に自信をもっていたようである。
(80・9・30)

友だち(隨筆)

秋山 清

九月二十四日の正午に新宿駅のビルの十四階に集まれという電話がかかって来た。そこは六十年前の友だち、旧制中学の頃の同級生たちがよく午食時の集合場所になつてゐる。遅れないように行くと三人ばかりいた。

「今日は細君に死なれてさびしかりうという慰めの集まりだ。大いに飲みながら昔ばなしでも」ということであつた。四人とも年令は七十五、六、客の少い、だだっ広い部屋でさかんに田舎言葉が飛ぶ。おれを慰めてやる会

秋の街はわびしくくれる

商店街のアーケードの下をあるいてみる

まだ宵だというのに人通りはまばら

いつのまにか洋服店が消えて、ベビー用品店になつていて

家具店が消えてラーメン屋になつていて

閉店のバーゲンセール

開店のサービセール

しかし女たちは家計を破裂させまいと
不買の一手

駅前にはネオンがかがやき

車の警笛がけたたましくつづいているが

そのあいまをぬつて

かすかに聞える崩壊の音

中小企業の灯の消える音である

零細企業の灯は音もなく消える

秋はわびしい

細々とふる秋の雨は刺すようにつめたい

ということだつたが誰一人、そんなことはない、昔、絵の教師のバネ(杉田先生の仇名)に脅かされたことなどが一番先に飛び出して来て、他愛もないというしかない。しかしそのうち一昨年从去年にかけて死んだ同級生の名前がちらほら出て来る。もつとも驚いたのは、同級生の集まりでは一番の元氣者で、皆の頭が白髪か禿けてしまつた中で、ひとり艶々と黒く、斉藤実盛みちだつた前田東一郎君というのが今年早く死んだことだつた。癌である。東海大の先生だつた森田は三年前か、松本徹はいつだつたか等々、死んだことやつと還つて来る幾

人かの記憶を探っているうちに、四人とも赤くなつて来た。この四人はひとりを除いてビール一杯で酔つたりする簡単なやつらであるのに、今日は、もう一杯、もう一杯と三度小ジョッキを注文して、柄にもなくメートルが上がつた。
十六、七才、小倉の制服にゲートルを巻き、下駄をはいて電車の飛下りなどして得意になつたものだつたが、そんな脚はもうあるまい、というのと、一瞬誰もだまつて、ひとりが昔のことだなアとしんみりした。そのときもうひとりが、一息吐いてから
「お前、再婚しろ」といい出した。「おれたちは三人とも細君の方が元氣だ。第一、いい年がひとりだしよぼしよぼしているのは見つともないぞ」という。それに同調してさらにいう。
「これから細君、なんてそんな氣力はあるまい」「何をこの野郎」とふと思ひ、こいつら「手前の年を忘れてやがる」「独りで生きてる自信のありそうでもないくせに」と思いつつ目をあげると、正面にいたのがいつた。「お前、詩人だそうだが、一昨年死んだ白浜が、面倒見なきやならんやつだ、とよくいつていたぞ、知つてるか」

それは知らない。あいつとは時々会つたが。だが奇妙なことになる。今日はなんだかうるさいな、まだ四十九日も済まぬ、あんまりいなよ、とふと思つた瞬間に、おかしなことをいつてしまった。

「お前らの世話になど」
と思つたそれがウソではないが、そんな風にいうつもりはなかつたのに、これはひどくつつきがわるい。だが、流石に氣にしたらしくは見えず、「お前、とても自分じやそんな細工は出来まい」と来た。

とたんに、それに向けて言葉がとび出した。「その氣になれば、二人や三人、なんだ、バカにするな」

おれはおれの年を忘れてるし、三人も同じことだ。どうでもいいことをさつきから、くりかえしているようなものさ。まるで根拠も可能性もない非現実なハナシを、いい出したやつとも言われたやつも、嬉しそうな大声をあげて、いち時に、ビールだ、ビールだ、ジョッキの小さいのもう一杯ずつ、と怒鳴つてしまった。

ぐいぐいと飲めるの一人つきり、他の三人は前に並べられたジョッキを引寄せながら、多分しまったと思つたにちがいないが、こう

なつては飲まぬというわけにはゆかぬ、兎も角真似ぐらいせねば。そこで三人は声を併わせて、

「好かつたぞ」

「好かつたぞ」

「ぐいっとあけよう。そら」

と恰好をつけた。
じつに苦勞なことだったが、おれも三口、四口で飲み干した。どうもおれのための干杯ということになつてゐるのだから。何ぶん、ふだんはとでも二つは飲めない、やつと一つで顔赤らめる三人が、もう一人は大分いける口だが彼とても、真つ昼間のビールを都合四杯も明けては、すっかり赤い顔になつて、卓を叩いた。

「お前は、今年じゆうに、十二月末までのある日に発表しなければならぬ。新郎新婦が顔を並べて、われわれ故郷を同じくし、年を同じくし、永年誼をたのしんで来た友人たちに、その由を披露せねばならぬ。われわれはまた、打揃つてその目出度い集まりに出席すべき義務がある」

「そうだ」

「さらに来年の三月四月の花の頃には目出たくゴールインしてわれわれ仲間を安心させる

義務があるぞ」

一人が宣言し、もう一人（おれ）が兎も角ウンといつてうなずき、他の二人の拍手が、ひろい部屋に鳴り渡つた。

時計を見ると三時四十分、まさしく四時間に近い永いひととき、冗談のたのしさの中にすごした次第だつた。中のひとりは大きなクッキーの箱を四つ買つて来て、お土産だ、といつて一つづつ渡し、同じのを自分も小脇に抱えてエレベーターのボタンを押しした。

この日、いろいろの言葉の錯乱した中に、「お前は詩人だ」というのが私の耳の底の方で、低いうなりのようにいつまでも自分に響いている。彼らはおそろくぼくの詩を一篇だつて読んだことはあるまい。だが、それでいて「詩人」という言葉を特に吐いておれに投げつけた。ふかい意味がここに存在している。詩として詩人についてそれを知ることには努力しない彼等といえども、何かひと味がつたものを以ておれと相対した。並の喜怒哀楽とはちがつた喜怒哀楽のとらえ方、その発動があるであろうという期待、のようなものがあるにちがいない。一癖も二癖もといつた不安ではなく、一桁外れた何かがあつてもいい人間の存在を感じとろうとしてゐる。損得の

風

山野 千工

最後の日記に

「無念」の言葉を書き残して、友人が亡くなった。

四十五歳であつた。

深夜の病室で、たった一人ペンを走らせる。

そのペンの音は、風のように病室を流れたらうか。

その、風の音を聞こうとすると、きまつて、中国大陸の内陸深く風だけが吹いているという場所を思い出す。

立ち止まることの許されない

敵しい世界が、

死期迫る友人の

深夜の姿に重なるからだろうか。

目安のみではないものが、ありそうだということ、そつと探つてゐる。宗教も政治も金儲も、そしてあるいは生もまた死も常識からも外れ得るものを、とまではつきりするのではないが、女房が死んで四十日そこそこの頃に、やれ再婚を約束しておれたちに報告せよ、来春の某日に型をつけろ、などとは非常識も甚しい筈の彼らの習慣と判断をすつ飛ばして、いいたいことをいったが、子供の日からの友だちとはいへ、だから誰にもそうと云い得るものではないだろう。あれは、おれに対する気安さからいい得たのだとオレはひそかに確信するのである。それ

が長年の彼らとボクとの友だち甲斐といわばいうべきところではないか。

わがままを、どこで、誰に、でもいつてのける野放図なオレに、気づいてるか否かは知らねど、彼らも、非常識な思ひつきがいえたにちがいない。例頭の幼な友達などといつたら吹き出したくなるような、こんな出鱈目がその交際を親しくする事を、私の「詩人」は、敵にも味方にも喜ばしいことと感じてゐる。前置きがあまりに長すぎたのは、さんざん述べた詩人の自由、いや自由とともに在る詩人のとりとめない情誼を、感じて欲しかったからである。

さて、このあたりでボクも開き直ろう。「詩は何のために書くのか」と、坐り直して頭をかき上げて、前に立つてゐる奴のつらさを覗みつけて、いつもそうしているのが本来のぼくの、理解の浅い頭で今日と昨日を過している、それが極めて本氣な私の課題である。

私はあれこれの所説をきき、昨今ようやくあるところに手をかけた。

詩は自分のために書く、というのはいささか古い。詩なんていらぬ。欲しいのは、ちつとも日常がきびしくなくて、向き合つて坐つた人々を楽しくさせる心の存在だ。大切なのは詩人であつて、詩などどうでも——。

面会

野口清子

登り坂の道をいくつものぼって
行き当たったところに小学校があった
チャイムが鳴っている
子供たちが
はじけるように
校庭をみたくしてゆく
山をきりひらいてできた町は
空気が澄んでい
左手に松林
健康な木肌をさらして直立する木々
丘の上のまあたらしい拘置所
明るいベージュに仕上げた コンクリート

の
分厚い建物に入ると
若いポリスが気軽に
面会手続きの用紙を差出す
待合室のトイレは水洗であった
先客が二人あつて
髪を肩までたらしただ女が
暗い顔をして膝を眺めている
もう何年も前の事 アメリカ軍事基地反対
メーデー事件 いくつものたたかいがあ
つて
小菅や横浜の拘置所を訪ねた時のことを
思いだした
田舎の田んぼにでも立っついていそうな、今に
も倒れるかとみえた便所と 木造バラッ
クの待合室には 面会の子供連れや 年
寄りや 疲れた身なりの男や女がいた。
耳もとでインタフォンがなる
面会室に入ると
看守のあとから無実の罪をでっちあげられ
た
小野さんが入ってくる
彼は大きくて 立派な体格をしている
こんなところに閉じ込められて
四六時中 看守に見張られている
とつかえしのつかない 彼の
時間を思うと 私の背筋に怒りが走る
「あと五分で三十分です」と看守が告げる
落ちつけなくなる
せまい面会室の真中を
不透明な防弾ガラスのような 分厚いガラ
スで仕切られていて
声も顔色も冴えない
小菅では 握手して別れた
横浜では 空気は自由に通つた
にごったガラスの向こう側で
手錠をかけられ 去つてゆく小野さんを見
送る

候鳥

和田英子

九月はじめ
海岸に棲みついたアジサシが
一せいに姿を消した
思いのままに羽をやすめた鉄柵に
白い糞が残り
高潮の波に没するばかりだ
斜めに折れ
海に落ちこんだ一本の柵
きのう
会社の門に入って植込みの前
ヘルメット
ズボン姿の女のひとが
たむろしていた

何年ぶりだろう
根深くつづいた不況の間
久しく途絶えていた風景である
目に立つ
濃い化粧
以前
船底の錆落し 清掃に
なぜ厚化粧を
とひとに問うと
ある楽しみのためだ
声をひそめて
応えてくれたが
海にむれとぶ
鳥の高さに
ハンマーをふり上げ
重さを競った
ぶあつい胸板をもつ
八ッ割り草履の
男達の
船底へ下りる女への
あわれみと
蔑視
背中合せの
くぐもった胸の中の
言い伝え
うけつがれて
ひそやかに応えたひとと
出向転職のあと
伝説は消え
いま
ふたたび
問う
何故に
厚化粧
夏のこと
波の上をかすめる
アジサシの眼を真近にみた
小鯛の群をねらう眼は
遠く するどく
くろずんで
かなしげであった

十一月二日の、戦争と平和

向井 孝

新聞「催し」ランに記事が出る。

1

自衛隊発足30周年記念行事。2日9時〜17時。式典、観閲式、訓練、展示、子供天国、模擬店など。陸上自衛隊伊丹駐とん地で

「こんなときしか、見物でけへんで」

「行くんやったら、ピラつくろか」

それで、手の中に入るほどの、小さな色紙のピラ二千枚。刷ったり、折ったり、六畳の部屋は、戦場さながら。

とうとう、朝五時まで――

2

午前十時半。阪急伊丹駅。

ポケットをピラでいっぱいふくらませて、降りてきた

ゲリラ兵士、九人。

ところが駅前には、祝賀アーチどころか、案内版も見当らない。

家族連れ姿もない。

「なんも変ったとこ、あらへんなあ」

とたんにトラックが三台、迷彩服の隊員を満載して、走りすぎた。

「やっぱり、ここ、伊丹やった」

しかし、そのあとは、だだっぴろい国道の一本道を、

テクテク、行軍三〇分。

エエ天気や――

3

伊丹市緑ヶ丘七丁目。陸上自衛隊中部方面総監部、伊丹駐とん地。

きょうは、大きく解放している門。

すぐ左脇の番小屋に、イスが横二列にならんで、若い

隊員がずらりと坐っている。

膝にこぶしをきちんとのせて。

4

前庭を通りすぎ、正面建物を左へ曲る。

ぱあつと、遠くまで視界がひらけて、

のしい広場の――平和。

6

手も足も出えへん

ピラ渡そうとしたら、みな隊員の家族にみえる。

小学生は、ピラを手にしてすぐ、お兄さんとこへ走っ

ていきそうや。

ええい、パアツと空中にまきちらして――ピラ爆弾――

思ったとたん、横丁から赤い腕章の隊員。

こらアカン。：自分の心が縛られてしても、どうしよ

うもない。

――考えてみると、家族たちの平和をかきみだして、戦争を仕掛けるのは、こつちになつてやないか……それで、見物してぐるぐる歩きまわって、四時間。

ミカン色のピラの束を、まるで爆弾のように、電話ボックス、便所の棚、食堂のメニューの下に、こつそり仕掛けてきたけど、

「自爆」せんかったのが、せめてのこと。

そこで、ゲリラの戦陣訓。

「平和の力をこそ、自分のものとして闘うのでなければ、アカン」

きょうの出撃戦果は――くたびれたなあ。

百メートル先きから、うわあ、小学校の運動会や。関東煮、ぜんざい、おすし……道の片側に張ったテントのなか。どつと笑い声があがつて、家族にとり囲まれた隊員の、息子や、兄弟や、恋人になった顔。戦争の気配なんてどこにもない――平和。

5

子供会やボーイスカウトのはしやぎ声。

「もう少し銃口を上には、台尻はしっかり肩につける。

さあ、息をとめて、よし、そう……射て！」

引金をひくと、実弾の代りに電子光線が出る。標的に命中すると、ランプがつく。

「うん、命中。80点」

お兄さんみたいな隊員が、一しよに腹這いになって、教えてくれる。

銃は、もちろん64式の本物。

だが、その横の、迷彩をほどこした戦車だつて、きょうはジャンゲルジムやし

一五五ミリりゅう弾砲の砲身も、のぞきメガネと変りはない。

やさしいお兄さんたちと、戦争ゴッコしてあそぶ、た

東京 点

小宮隆 弘

半袖シャツの肌に冷房が寒い
すし屋に別れて
雑踏の駅 新宿東口に立つ
なかえの息子はおそく
均整のとれた少女の
シヨートパンツのひざ小僧に
青年たちのちびれた頭髮
うしろのビルで色かわるネオンの
混乱する光の美しさが
ふくらむ騒音を彩っていた
あんたの問うその人は
協会派の元凶の一人だ
出勤バスの吊革にぎるせわしきの中で

知人の県議がいつか
演説調の言葉でさとした
その元凶の顔にさよう初めてあった
政治家は嘘つきだ
開会時刻のおくれた間を
同人の誰かがいった
その政治家の語り口もきいた
落選したという詩人
その人の

三輪車を踏んできた孫娘を背負って
ランニングコースの川の堤防道にあるいた
右に芝生 グリーンベルトは立入禁止
あちこちに放たれた犬の脱糞に
安全地帯の鎖につながれた自由があった
フェンスを越えた土手下は
ハゼが釣れないから
セイゴ仕掛にとりかえているという
老釣人の竿先を
団平船の鈍重な航跡が川を下っていった
ひもをゆわえつけて
三輪車をひっぱっていく息子は

川の名は知らなくてもよいと
一言いった

砂場のある街中の小さい公園で
力士が三人
ビールびんの水をふくんでは
地面に霧を吹いていた
柵に干されている稽古まわし一本
押された朱色の大きな手形を
孫娘がなぞっていた
隣は九重部屋

金大中氏死刑判決
千代の富士 北の湖にうつちやり勝ち
午後五時〇分東京発みずほ号
横浜をすぎる
沿線のあぜ道に満開の彼岸花つづく日暮れ
三号車五番 六人席に一人
寝台までにはまだ時間がある
列車のゆれだけではあるまい
眠れぬ予感に
ワンカップ富久娘の三本目の封をはぎとる

後 記

○九月十五、十六日に東京に集まって貰ってはじめての同人会というものを「コスモス」が開いた。そのことの簡略な報告が、会幹事の一人村松が書いているから、それについては本号では、これだけ。ただし同人会における話しあいや報告や討論などは次号にややすべースをとって書かれる予定。
○またかつてなかった、規約や同人すいせんのこと、同人費などについての取組みも、少しくわしく報告される筈。
○集まって見るとコスモスの同人はまことにすくない。年もとっている。しかし顔を赤くして三時間、四時間と話しをたかかわせているのを見ると、人ごとでなく愉快になった。まったく見てくれのさびしい雑誌だが、そして自分の年も忘れて腹を立てることの出来るのが、日本にもこれだけいるのかと思うと、役手もない詩など書いていることが、少しばかり恥かしくなくなる。
○誇るべき何ものもありませんが、卑下する何ものもわれ等と共にはない。新しくないこともたしかだが、しかし時代遅れではない。

何か？ 時代に向けて腹を立てることの出来る自信、いや自覚、子供っぽくいえば正義心、みたいなものがわれわれをけしめられる。われわれはそれにけしかけられて、恥かしがらない。
○はじめての全国同人会の夜、同人中で二番目に年の数の多い男が、どこの人だか知らぬ男をとっつかまえて、日頃よく肩が痛い／＼とこぼしている時とは違ふ顔をほんのり赤くして、恋愛論をしゃべっていた。ぼくらはしばらくその若い話題にきき惚れていた。
○こんな風に書けば、他愛のないと人はいうだろう。それでいいのだ。精いっぱい言いたいことをいえればいいのだ。これをかいている向うで、議会が、政府が憲法やり直し問題で、いったでもない、言わぬでもない、と押問答している。言葉のアヤで勝ちを取ろうとするのだが、論議ではない、多数決で結着する上に、どっちにしても民衆のためになど考える余地はないのだから、もうもう政治の季節には程遠い。やがて原発の世の中になって、人間が非人間化して、昔に戻れぬことを泣いても追つかぬこと、間ちがいないし。
「詩を何故書く」「誰のために書く」、この少しばかりの問題に取組んでる者は今どこ

にも居るとは見えない。それは少数のわれらだけらしい。

寺島珠雄 四六判上製本◆288ページ
断崖のある風景
小野十三郎ノット
プレイガイドジャーナル社
〒542 大阪市南区塩町通3・2・1・207
振替大阪21561

コスモス 第31号 (通巻70号)
定価 1600円
〈定価五〇〇円 千二〇〇円〉
発行行 一九八〇年十一月三〇日
編集人 秋山 清
発行所 東京都中野区上鷺宮五十一八一八
電話 〇三 九九八一―二九二五
印刷 (資)オカダ印刷
名古屋昭和区長戸町四一〇